

の男子四人(何れも参議)が四月から八月の間に痘瘡のために急死した。政府はそのため天平九年六月二十六日、諸国に官符を下して、この病氣(官符の中で病名を赤斑瘡と云っているのは誤り)についての症状、治療法などを官符の中で説明している。『病と日本史』には詳しく書いていないが『日本の医療史』には詳しく述べている。私が特にこの官符に注目するのは二百年後の永観二年(九六四)に朝廷に撰進された『医心方』の第十四巻の第五十七条豌豆瘡を治す方の中に、この官符を載せていることであり、撰者丹波康頼は極めて強い印象を受けていたことを物語っている。

次に興味を感じるのは、巻末に記述してある杉田玄白の号である「九幸」についての解説である。玄白が初めて九幸老人と号したのは七九歳の時、両手をあげて軽く踊る自画像を描いた時に用いたのが最初と云われるが、その謂れとして本書には次の様に説明してある。

玄白が数えた九幸とは、一に泰平に生まれたこと、二に都下に長じたこと、三に貴賤に交わったこと、四に長寿を保ったこと、五に有禄を食んだこと、六にいまだ貪をまつたこと、七に老いてますます壮なることである。では読者は自分を何幸と云えるだろうか。

しかし玄白も八十を越すと、老いてきて目、耳、口の不具合を嘆いて、長生の辛さを語っているが、八五歳でこの世を去った。著者は幸せを全うするには、からだを健やかに生

きるこそ最も重要であると結論している。
やがて八十歳を迎える私にとっては、まさに感慨を同じくするものがある。

(杉立 義一)

〔講談社、東京都文京区音羽二一―二一―二一、電話〇三―三九四三―九三〇三、二〇〇二年五月二〇日、B六判、二七〇頁、定価本体一八〇〇円〕

外山 幹夫 著

『医療福祉の祖 長与専齋』

中世史専門の著者が、長与専齋を取り上げた理由は三点ある。長与がわが国近代の医療・衛生、及び福祉体制を確立した人物であること、著者自身が大村市の旧武家屋敷に幼少の頃から青年期まで住んでいたこと(長与家は大村藩藩医であつて、著者の家の近くに長与家の墓地があつた)が第二点、そして現在、著者が勤めている県立長崎シーボルト大学が、専齋の本貫地の長与町(長崎市の北隣)に立地していること、これが第三の理由で、平成十一年度の大学公開講座において「長崎と長与専齋」と題して講演したことが、本書を書き上げる動機になった、と著者は「あとがき」に述べている。

ところで、専齋の自伝「松香私志」は私家版であるので、今日の吾人らが読めるのは「松本順自伝・長与専齋自伝」、小

川鼎三・酒井シヅ校注(東洋文庫) 平凡社・昭和五十五年初版本であろう。

『専齋自伝』は文語体であり、その上、写真等がある訳ではなく、正直いつて余り面白いものではない。

何故かといえば、原本の「松香私志」は元々他人にみせるものではなく、子孫に伝えるための遺著であった。それを息子の称吉氏が医務衛生事業の創始の一端をうかがえる書とみて、明治三十五年に発刊したものである。

従つて視覚的ではない。この欠点に著者の外山氏は注目し、今回、かなり稀な写真をもりこんで読みすすむ意欲がわく書に仕上げられた。

といつても、私好みで申すと、もう少し面白い話はないのであろうか。例を福沢諭吉との交流についてみてみる。

専齋は、明治四年十一月十二日に岩倉使節団に加わつて米欧に向う前、発疹チフス後の福沢を見舞う旁々、洋行の挨拶に行つた。手みやげに塩酸キニーネの最上品を一オンス(約三十一グラム)持参した。ところが福沢は専齋が告別にて外国での暮し方の教示を受けきたと思ひ、強がつて「ぼくの身体に薬なんぞいるものか」と云つて受け取らない。専齋は「きつと役立つから黙つて取つておけ」と押しつけるようにして福沢家を去つていつた。専齋の外遊中、福沢はしばしば発熱し「それキニーネ、またキニーネ」と服用し、とうとう一オンスを飲み尽した。(『福翁自伝』より) 明治の男達を感じるエピソードだが、この事件は二人の交遊を単なる大坂

適塾の同窓生同志以上のものにし、その後の二人のやり取りに継がっていくのである。

明治二十二年五月の乙西会(名望医家の会)の例会で、二十三年四月に「第一回日本医学会」を、全国の医師有志を東京に集めて開催しようと決まつた。準備を重ねていくうちに、第一日の開会式に続き先哲祭を挙行しこれを長与専齋が執行することとなつた。

専齋は良い機会であるので、幕末に神田孝平が本郷で発見し、明治二年に福沢が木版刷で出版した杉田玄白著の『蘭学事始』を、鉛活字で出版しようと決意した。そして専齋は『蘭学事始』に縁深い福沢に「再版の序文」を書いてくれと申し入れた。福沢は早速引き受けたものの、二十数年前のことは神田孝平に確認を要すると決め、神田と会談後の執筆となつた。従つて日数がたちすぎ専齋も二度三度と催促したが、期限の四月一日が来てしまつた。四月一日、多忙の中、専齋はこの日二通の督促状を送つた。その返書が同日二通専齋に送られている(福沢諭吉全集・第十八巻・岩波書店)。それらによると、やつと神田に会えて念を入れ、唯今書き上つたのとどけるとある。それが「蘭学事始再版序」で、有名な「我々は之を読む毎に、先人の苦心を察し、其剛勇に驚き、其誠意誠心に感じ、感極りて泣かざるはなし」という劇的な文言を生んだのである。この学者社会の宝書である『蘭学事始』活版本はこの様な経緯の下に、第一回日本医学会の会期中に出来上つたのである。この活字初版本の発刊によつて

『蘭学事始』は全国の識者に知れわたったのである。専齋のかくれたる大功績であって、これは忘れてはならぬことである。

紙数がつきた。専齋が口にしたといわれる、十九年の頓坐、つまり明治十六年以降の民権圧迫を核とする改革政策に対する専齋の意見について、残念ながら本著にはほとんど叙述されていない。当時の専齋がもつとも良質と考えていた「フランスの地方行政制度」、その導入に基づく衛生業務の改正構想にふれてもらいたかった。これはないものねだりであらうか。

それはともかく、長与専齋の伝記、明治医制史の入門書として本著は役立つと思う。若き学徒に熟読をお願いしたい。

(中西 淳朗)

(思文閣出版、京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五一七五一―一七八一、二〇〇二年六月、四六判、二〇〇頁、定価本体二〇〇〇円＋税)

編集後記

四十八巻四号をお届けする。会員諸氏におかれては、新潟での歯科医史学会との合同総会を終えたばかり。すぐに来年福岡総会の抄録提出というペースで、せわしなかったことと拝察している▼総会は学会の一大行事であり、つつがなく開催するのが、いかに大変なことかはお存じのとおり。それゆえ開催地と会場の都合が最優先で、今回のように総会の半年後に翌年の総会となってしまうことがあるのはいたしかたない▼もう一つの柱は学会誌であり、高水準の維持と順調な発行が編集委員会の責務である。これは掲載論文に関する諸事のみならず、ページ数・刊行費など相当に些細な点にも及ぶ。それらについては編集委員が順次担当する当欄で、毎号お伝えすべきことを記してきた▼先月号で町委員も言及したが、これまで続いてきた本誌刊行への科学研究費補助金が今年度は出ないことになった。いつになったら再び交付されるかも分ならず、日本学術振興会に毎年申請し続けるしかない。まことに困った状態になってしまった▼科研費の交付には、年度内刊行総ページ数の制限、および欧文論文ページ比率等の条件があり、指示は年々厳格になっている。それで最近はやや論文の投稿が増加傾向にあるのに、一定比率の欧文論文を掲載しなければならなかった。ために、審査を経て受理された和文論文の掲載が遅れた場合もないではない▼ならば科研費補助のない今こそ総ページ数の心配なく、受理された論文を迅速に掲載すべきだろう。だが、それは発行費増に直結し、助成がなくなつた学会の台所をさらに苦しめる。まさしく矛盾そのものだが、会員諸氏のお知恵をいただき、斯学の発展に寄与したいと思う。

(真柳 誠)